３.加塚遺跡発掘調査報告

１．はじめに

加塚遺跡は、亀岡市安町小屋場に所在する。遺跡範囲内には、須恵器や土師器が散布していることが確認されており､周知の遺跡として「京都府遺跡台帳」に記載されている。この一帯には、古代の集落遺跡が存在したと推定されている。

今回、京都府建築交通部により加塚遺跡の範囲内に道路整備事業が計画されたことから、事業に先行して発掘調査を実施するはこびとなった。

当センターでは、平成22年度国道372号地方道路交付金(公安)事業に係る加塚遺跡発掘調査を、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会等の関係機関、および地元自治会のご協力を得た。なお、本報告は田代が執筆した。

現地調査責任者　調査第２課長　肥後弘幸

調 査 担 当 者　調査第２課主幹第３係長事務取扱　石井清司

同　次席総括調査員　田代　弘

調　査　場　所　亀岡市安町小屋場

現地調査期間　平成22年12月８日～平成23年１月18日

調　査　面　積　300㎡

２．遺跡の立地と周辺の遺跡

加塚遺跡は、西山の北から北東に広がる段丘上に広がる集落遺跡である。周辺には土器類などが散布しているのが認められ、古代の集落遺跡が広い範囲で広がるものと考えられる。調査地点は、山麓から小さく張り出す舌状の段丘上に位置する。北側には浸食による谷地形がある。

この遺跡の周辺には、余部遺跡、加塚古墳、狐塚古墳、南の西山には風ノ口古墳群、安行山古墳群などがある。余部城跡、亀山城跡・亀山城下など中世～近世にかけての城郭とその関連遺構などが分布している。

第１図　調査地と周辺遺跡
(『京都府遺跡地図　第３版』第２冊
京都府教育委員会 2002)

余部遺跡は、加塚遺跡の北西にある集落遺跡である。弥生時代中期初頭から集落が営まれは

じめ、中期を通じて大型の集落遺跡を形成する。1997年度と1998年度の調査で、中期初頭の玉作り遺構や、方形の竪穴式住居跡が多数みつかり、大井川右岸の弥生時代中期の有力なムラのひとつであることが判明した。以後、中世にかけて断続的に遺構が営まれる。

加塚古墳は、全長60mの規模を持つものである。大半が壊れているが、墓地の中に墳丘の一部が残っている。築造時期はわからない。狐塚古墳は、段丘の縁辺に造られた長さ22m、幅17m、高さ2.3mの楕円状の不定型な古墳である。築造時期はわからない。

安行山古墳群、風ノ口古墳群は、古墳時代後期に造営された古墳群と推測されている。安行山古墳群は二基からなる。１号墳は、径18.7m、高さ1.4mの円墳で、段築が確認されている。２号墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳である。風ノ口古墳群は、10基の円墳からなる。４～７・10号墳は横穴式石室があることが確認されている。この古墳群は、直径10mを前後するものが多いが、10号墳だけは直径21.4mと大型であり、この古墳群の中でもっとも地位が高い人物あるいはその家族が埋葬されたと考えられる。

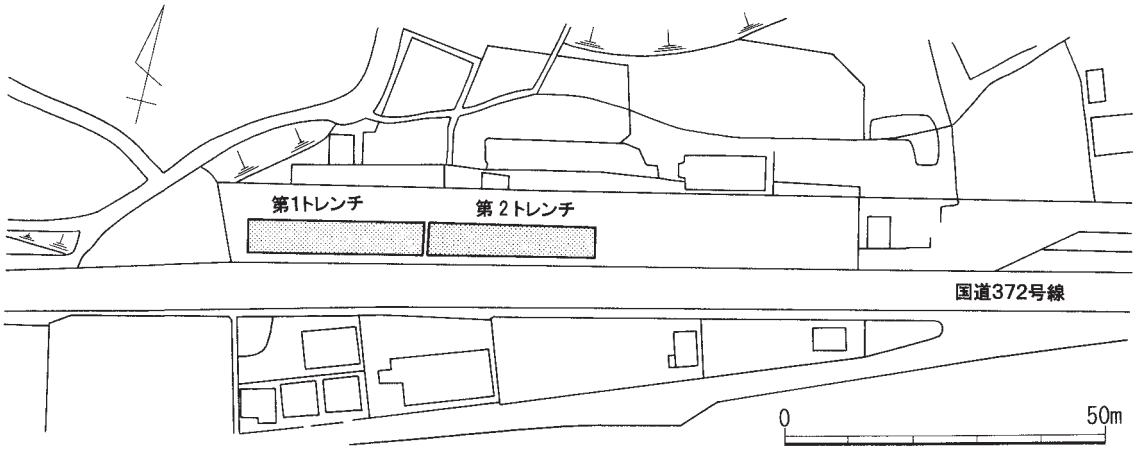
余部城跡は、加塚遺跡の真北に位置する中世の平城跡である。本丸跡、堀跡、空堀跡の一部が遺存している。城主は、福井因幡守貞政である。明智光秀による丹波平定の折に落城し、その後、砦として機能した。

亀山城は、中世に山城として築かれた。その後、明智光秀によって丹波統治の拠点として築城された。江戸時代初頭には重要拠点として整備され、江戸時代を通じて丹波を押さえる城として重要視された。交通の要衝に位置しており、城下町も栄えた。天守台、本丸、石垣、大堀、内堀、外堀の一部が遺存している。

３．調査成果

調査対象地内に東西方向に二本のトレンチを設定した。西側のトレンチを第１トレンチ、東側のトレンチを第２トレンチとした。

調査は、表土である現代の整地土層を重機を用いて除去した。その後、壁面での土層堆積の観察、遺構面を確認するための掘り下げ、精査などを人力により行った。作業の進捗に応じて、随



第２図　トレンチ配置図

時、実測図作成、写真撮影などの記録作業を行った。

二つのトレンチの土層堆積状況は、第４図に示したとおりである。

第１トレンチでは、３層を確認した。第１層が現代置土、第２層が水田土壌である暗青灰色のグライ土壌、第３層が地山にあたる黄灰色粘質土である。かつて、地山を整地し水田耕作地として土地利用されていたが、その後、道路拡張工事や住居地の移転などのため、埋められて整地されたと考えられる。

第２トレンチでは、第１トレンチで確認した第２層がなく、第１層の現代置土、置土直下で地山にあたる黄灰色粘質土である第３層を検出した。

第１トレンチ

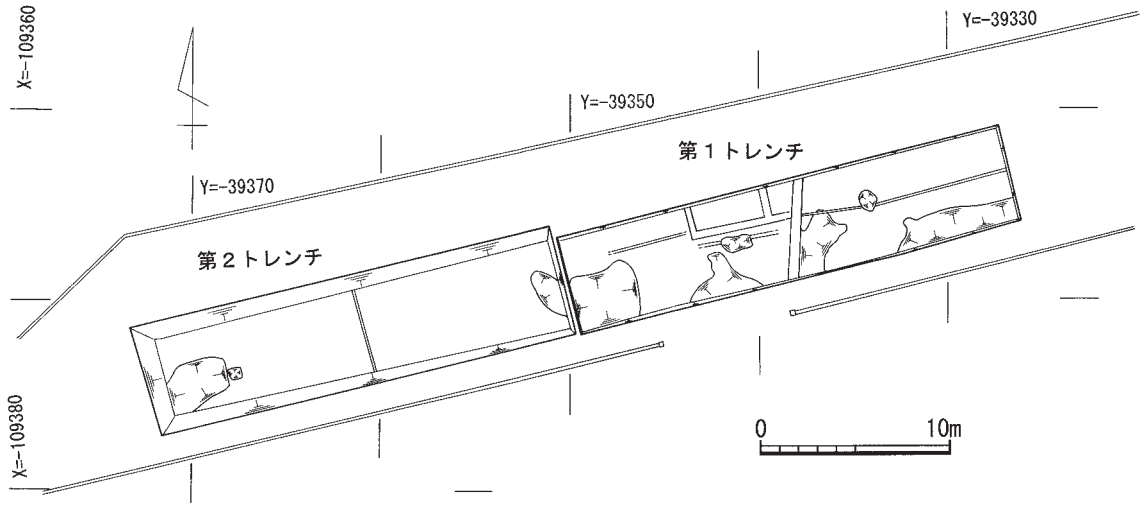
160㎡を調査した。調査にあたって、まず、現代整地層を重機で掘削した。旧水田層が認められたので、重機で床土まで除去し、その後、人力でトレンチ内を掘削し、精査を行った。

表土下60cmで、青灰色の良質の粘土が認められた。この粘土層は、黒ボク層より下位に認められる古い堆積層であり､遺構のベースとなる層である。この粘土層上面で精査を繰り返したが、古代の遺構・遺物を検出することはできなかった。

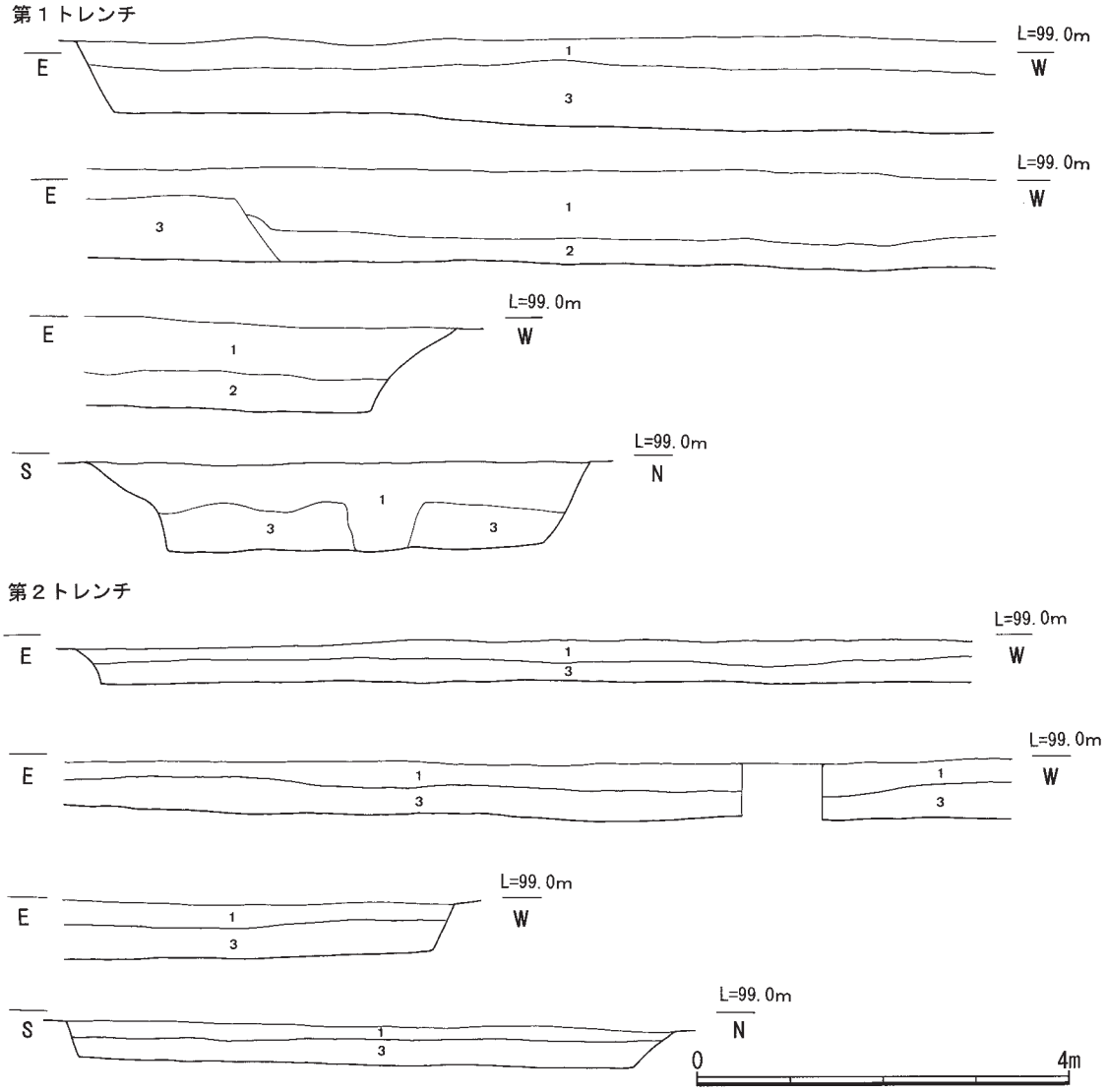
第２トレンチ

140㎡を調査した。第１トレンチと同様の方法で、約20cmの現代整地層を除去すると、やや黄色がかった青灰色粘土を検出したが、旧水田跡は認められなかった。この場所は、段丘のピークへと向かう地点にあたるので、もともとベースの水準が高いことから、水田等はすでに削平されて失われたと考えられる。

この粘土層は、第１トレンチ同様、黒ボク層より下位に認められる古い堆積層であり、遺構のベースとなる層である。この粘土層上面で精査を繰り返したが、古代の遺構・遺物を検出することはできなかった。



第３図　第１・２トレンチ実測図



第４図　第１・２トレンチ土層断面実測図

４．おわりに

後世の削平により、遺構面が失われてしまった可能性が高い。加塚遺跡に伴う、遺構・遺物を検出するには到らなかったが、以下の点について新たな知見があった。

今回の調査地点は、地形が改変され、盛り土がなされているなどの見解があった。しかし、水田造成や宅地開発などの際に行われた整地作業により削平は受けているものの、旧地形が段丘縁辺部まで、ほぼ残っていることがわかった。

したがって、西山と北に接する開析谷までの間は、削平された部分を除けば、自然な状態をとどめており、古代の遺構や遺物が遺存している可能性が高いと考えることができる。

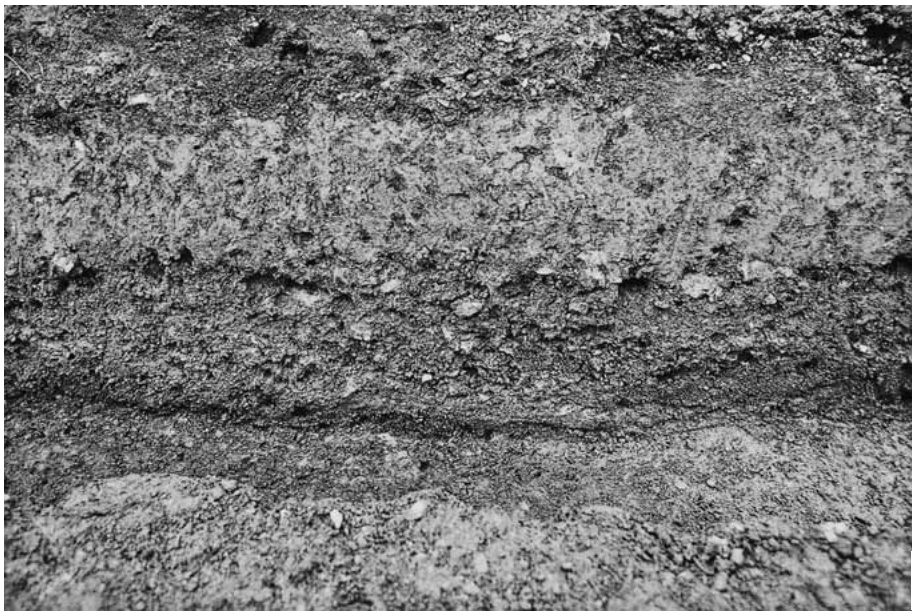
図　　版

(1)調査地遠景(南から)

(2)第１トレンチ重機掘削状況
(西から)

(3)第１トレンチ測量状況(東から)

(1)第１トレンチ遺構検出作業状況
（北西から）



(2)第１トレンチ南壁堆積状況
（北から）

(3)第１トレンチ完掘状況（西から）

(1)第２トレンチ荒掘り状況
（東から）

(2)第２トレンチ遺構精査状況
（東から）

(3)第２トレンチ実測作業状況
（北東から）

(1)第２トレンチ完掘状況
（南東から）

(2)第２トレンチ完掘状況(西から)

(3)調査終了後、重機による埋め戻し作業状況